

# 配偶者選択の点から見た身体に対する 接触回避の適応的意義

羽成隆司      河野和明      伊藤君男

## 要約

嫌悪や接触回避が、われわれにとって有害な人物を拒絶する機能を持つのであれば、これらは配偶者選択においても、重要な役割——望ましくない異性を配偶者候補リストから除外する機能を持つ——を果たしているのではないかと本研究は、スティグマ的属性を持つ異性——そのため、配偶者候補となることが不利になる——に対する接触回避の性差について論考した。女性回答者は、一般的な嫌悪状況に対して男性回答者よりも嫌悪感が強いが、ほとんどのスティグマ人物について、スティグマ女性よりもスティグマ男性に対して、接触したくないという反応を示す。一方、男性回答者では、ほとんどのスティグマにおいて、スティグマ男性とスティグマ女性両方に対して同程度の反応を示す。これらの結果を、進化心理学的視点にもとづいた配偶者選択の観点から検討した。そして、ヒトの繁殖行動における性差の要因——女性は配偶者選択における失敗のコストが男性より大きいと、望ましくない特徴を持つ異性を強く回避することが、繁殖成功にとって合理的である——に依存していると結論づけた。

## 1. はじめに

### 1-1. メディアとしての身体：コミュニケーションにおける身体的作用

まず、われわれの身体がメディアとして機能していることを確認しておきたい。「メディア」をコミュニケーションのための媒体、すなわち、人と人をつなぐ手段と考えたとき、われわれの「身体」もまた重要なコミュニケーションの媒介手段であると言える。われわれは他者と対面しているとき、身体を通して言葉を発し、表情やしぐさを交えて、意志の伝達を行う。むしろ、身体こそもっとも原初的なメディアと見ることができる。とくに身体は、表情、しぐさ、姿勢、動きなどによって、それらを行う本人が明確に意図していない場

合も含めて、言葉以外の様々なメッセージを発している。そして、それらを見る側も、身体から様々なメッセージを受け取ることになる。たとえば、第一印象の大部分は、身体の外見で形成されてしまう。目が吊り上がっている顔をしている人は怖そうとか意地悪そうとか、太っている人はおっとりした性格に見える。こうした印象は瞬時に生じる。また、外見に現れている何らかの大きな損傷（スティグマ）は、一定の不快感やその人物に対する回避行動を誘発することが普通である。倫理的、道徳的な観点からそれらを直接表出することは抑制されることが多いけれども、不快感や回避傾向の生起自体を完全にコントロールすることは難しい。

### 1-2. 身体から発せられるメッセージ

われわれが他者と正確にコミュニケーションす

るときに用いるもっとも効率的な手段は、言語である。とくに他者を説得するときや、態度を変えさせるときのような複雑な情報のやりとりが必要な場合には、言語的コミュニケーション (verbal communication) を行う。しかし、コミュニケーションは、身体を中心とする言語以外のチャネルを用いても頻繁に行われている。言語以外のチャネルによるコミュニケーションを非言語的コミュニケーション (verbal communication) という。非言語的コミュニケーションは、状況によっては言語的コミュニケーション以上に対人関係のあり方に大きな影響を与える。とくに対人関係の感情的側面においては非常に重要である。非言語的コミュニケーションのチャネルには、姿勢、身振り、表情、視線、瞬目 (まばたき)、対人距離、服装、化粧などのほか、姿勢の反響や動作の共調など、身体の動きを伴うものもある。これらによって多くの情報が発せられている。言語に伴うアクセントや声の大きさ、話す速さなどもチャネルであるが、多くのチャネルは身体にかかわるものであり、身体がメディアとして機能していることがよくわかる。たとえば、「相手の話を聴く」場面では、“あいづちやうなずき”を交えながら、“軽い前傾姿勢”で、“相手の目を見”ながら、“余計な手足の動きをしない”ことが、話し手からの信頼が得やすい。いずれも身体のわずかな動きに過ぎないが、コミュニケーションに及ぼす効果は非常に大きいのである。

### 1-3. 正直な信号のメディアとしての身体

では、なぜ身体が発する情報はコミュニケーションへの効果が大きいのだろうか。端的に言って、それは言語的コミュニケーションに比べて身体が発する情報が発信者の状態をより正しく伝えるからである。人間は、複雑な言語を運用する能力を備え、きわめて精密な情報を効率よくやりとりできるようになった。しかし、言語は意識によって操作できる、いわゆる制御的な信号系であ

り、その気になれば発話者の意図で内容をどのようにでも改変できる。絶対にあり得ない世界すら言語によってきわめて豊かに表現可能なことは、できのよいファンタジー小説を一読すれば即座に理解できるだろう。日常的にも、このような能力を使って、実際に人は日常的に嘘をついている (DePaulo et al., 1996)。言語による情報は、精緻で、複雑で、そしてときどき虚偽なのである。このように発信者側が簡単に虚偽の信号を送信できる言語は、受信者側にとって非常にやっかいな情報源と言える。言語から得られる情報は豊かで精密である。その内容が真である限りにおいて、コミュニケーションによる利益は大きい。しかし、もしそれが偽であるなら、取り返しのつかない失敗をしかねない。たとえば、パーティー会場で、「あなたのような有能な人は殺してやりたいよ」と話しかけられたら、すぐに通報しなければならないのだろうか？ それとも、相手の肩をたたいてこちらも軽口をたたけばいいのだろうか？ それは、発話者が怒りに身を震わせているのか、逆に話し相手を賞賛してにこやかに笑いかけているのかを見極めなければ判断できない。また、発話者が手にもっているものが飲み物のグラスなのか凶器になるような何かなのかにもよるだろう。ここでもし判断を間違えたら、パーティー中の笑いものになるか死体になるか、いずれにせよダメージは甚大である。多くの場合、言語情報だけではその内容をどう受け取っていいのか確定できないのだ。

一方、非言語的コミュニケーションは、姿勢、表情、声色などであり、これらはある程度制御的なプロセスではあるものの、意識的な制御が相対的に難しい信号系である。たとえば、情動生起直後の顔面表情の微細な変化は意図的な隠蔽が難しいことが知られている (エクマン、1992)。また、笑顔は、心からの笑顔 (デュシェンヌ笑い) と作り笑顔に比較的確な違いがあり、それには神経生理学的な背景をもつことが知られている (ダマ

シオ、2000)。こういった身体的な表出は、代表的な非言語コミュニケーションの信号である。行動生態学の文脈では、発信者の状態を受信者に対して正確に伝達する信号を「正直な信号 (honest signal)」と呼ぶ (Cartwright, 2000)。言うまでもなく正直な信号は受信者側にとってより信頼の置ける信号である。われわれが一般に、ごくわずかな表情の変化など、コミュニケーション相手の身体表出に対して非常に敏感であるのはここに起因する。

人は、比較的正直な身体表出と、正直なときも不正直なときもある言語表出とを取り混ぜて、虚実様々なコミュニケーションを行っている。そしてわれわれは、これら2つのチャネルからもたらされる信号が意味することを照合しながら、相手の意図や伝達される情報の正否などを絶え間なく推し量っているのである。

#### 1-4. 本研究の目的

上記の例では、身体から発せられる視覚的なメッセージについて言及したが、さらに身体は接触を介したメディアとしても機能する。後述するように身体接触は愛着 (attachment) の基礎をなすものであり、情緒の安定や互いの信頼感をもたらすものでもある。

その一方で、何らかのスティグマ的特徴を持った身体に対しては、それを警戒し、接触を回避しようとする行動をとることがある。ある対象に対する嫌悪感や、それとの接触を回避しようとするもののおもな機能は、有害なものや人物を拒絶し、自身を防衛することにある。本論考では、このような身体に対する接触回避に着目し、その適応的意義について検討する。とくに、スティグマ的特徴を持つ、自身と同年代の異性とのコミュニケーション場面において生じる接触回避について考察したい。ここでは、「自身と同年代の異性とのコミュニケーション場面が、潜在的に配偶者選択の可能性を含んでいるならば、直接または間接的な

接触場面において、望ましくない身体的特徴を持った異性を回避しようとする行動が見られる」という仮説を検証してみる。

以下、本論文では、コミュニケーションにおける身体接触の役割について概説をした後、われわれの調査結果にもとづいて、身体への接触回避の適応的意義と配偶者選択における性差の要因の関係について、進化心理学的な観点から論考していく。

## 2. コミュニケーションにおける身体接触の効果

### 2-1. 愛着と身体接触

子どもと親、恋人どうし、親しい友人どうしなど、緊密な関係にある場合はそれぞれのしかたで身体接触を行っている。身体接触は、愛情を確認し、安心感を与える、与えられるという効果を持つという点で、コミュニケーションの基礎をなすものである。

接触とコミュニケーションについては、Harlow & Mears (1979) の代理母親を使った愛着形成の要因を調べた研究が有名である。この研究では、アカゲザルの赤ん坊を本当の母親から引き離して養育した。そして、針金製の代理母親と布製の代理母親をペアにして呈示して、赤ん坊がどちらを好むかを観察した。赤ん坊は、ほとんどの時間を布製の代理母親のところで過ごした。針金製の代理母親の方からミルクが与えられる条件では、そちらへ行ってミルクを飲むことがあっても、それが済めばやはり布製の代理母親の方で過ごした。針金を暖かくして、布を冷たくしておいても結果は同じであった。これらの結果から、愛着の形成には、食べ物を与えてくれるかどうかということよりも、快適な接触感（接触の快）が重要であると結論づけられた。

なお、この実験のアカゲザルの赤ん坊は、本物の母親を奪われた状況で育つということになる

が、これを「マターナル・ディプリベーション（母性剥奪）」と言う。このアカゲザルは、発育の過程で様々な異常を示す。情緒が不安定になることが多く、自傷行為（自分の毛を抜いたり、手足をかんだりする）や常同行動（意味なく何度もその場でとんば返りなどの同じ行動を繰り返す）などがよく見られる。さらに、成長した後も、他のサルとのコミュニケーションがうまくいかず、つがいを作ることが困難になる。メスの場合、子どもを産んでも、通常の子育てができないなどの深刻な問題が生じることが多いとされている。マターナル・ディプリベーションの影響は、ヒトの場合でも類似の症状が確認されている（Bowlby, 1973）。

これらの知見から、通常の親子関係で、子どもが親に愛着を持つことと、親に抱かれるときに感じる接触の快とが非常に重要な関係があることがわかる。もし、そうした身体接触が不十分な場合には、様々な異常が現れることがあるので、親子間の身体接触は正常な発育にとって不可欠なのである。だからこそ、幼い子どもは親に抱かれることを好むのであるし、とくに不安な場合にはそれが顕著になるわけである。

子どもから親への愛着だけでなく、身体接触を求めることは、親密な者どうしのコミュニケーションには普通に見られる。子どもが親に抱かれたいと感じるのと同様に、親も子どもを抱きしめたい欲求を持つ。恋人同士では性的な接触も行われる。性的な関係がない場合や同性間でも、軽く抱き合う、ねぎらいの意味を込めて身体に軽く触れるなどはよく行われている。

## 2-2. 化粧の起源

モリスによれば、化粧も元来は接触によるコミュニケーションの機能があったという。化粧の起源は、複数のサルが互いに行うグルーミング（毛繕い）であるとモリスは指摘している（モリス・石田、1999）。グルーミングの第一の目的は、寄生虫やゴミを取り除き、毛をきれいに保つことにあ

るが、友好性を保つ機能も持っているという。つまり、接触によるコミュニケーションである。モリスはこれを「社会的グルーミング」と言っている。ヒトでも、スーダンのヌバ族やニジェールのウォーダベイ族は、現在でも互い化粧を施し合うという習慣を持っている。互いに化粧をし合うことは、友好性の確認や強化とともに、接触によるマッサージの効果とそれによる気分の安定の効果をもたらす。グルーミングと化粧が同一の起源を持つものと結論づけるには議論の余地があるが、鏡が日常的に使用される以前は、ヒトの場合も、化粧は他者によって施されていたわけであり、接触によるコミュニケーションを伴うものであったことは確かである。

以上のように、親密な関係の者どうしは身体接触の頻度が多くなるわけであるが、これを逆から見ると、かかわりたくない他者に対しては、それを嫌悪したり接触を回避したりするということになる。以下、身体接触への嫌悪や回避について検討してみよう。

## 3. 嫌悪感・接触回避の適応的意義

### 3-1. 嫌悪感のしくみ

有害なものや人物を嫌悪したり回避したりする行動は、“元来は”自身を守るための機能として進化してきた。このことは、Rozin, Haidt., McCauley, & Imada (1997)、Rozin, Haidt, & McCauley (2000) による嫌悪の理論で強調されている。Rozin らの理論では、嫌悪感のもっとも基礎にあるのは、“まずい味 distaste” への嫌悪であり、続いて“中核的嫌悪 core disgust”（食物、摂食、糞尿等の身体産物、動物等への嫌悪）、“動物的性質への嫌悪 animal disgust”（性・死・不衛生・奇形や毀損された外面への嫌悪）へと発展拡張していったとされている。さらに、これが、“対人嫌悪 interpersonal disgust”（直接的あるいは間

接的によそ者や望ましくない人と接触することへの嫌悪)、“道徳的嫌悪 moral disgust”(特定の道徳違反への嫌悪)へと進化したとする。これらの嫌悪感は自身や所属する社会を守るための適応的な意義を持つ。まずい味への嫌悪は毒物から、中核的嫌悪は病気や感染から、動物的性質への嫌悪は死から、それぞれ身体を守るための行動を動機づけるために生起する感情ということになる。対人嫌悪にかんしては、人々は、奇形、病気、あるいは不道徳な前歴など、望ましくない特徴を持っている者を嫌悪したり、避けたりすることが実証されている(Rozin, Markwith, & McCauley, 1994)。対人嫌悪も道徳的嫌悪も、自身や社会の秩序を守るために機能する感情と位置づけられる。このように嫌悪は適応上非常に重要な役割を持っていると考えられるが、データ収集の難しさなどの理由もあって、嫌悪をテーマとした研究は必ずしも十分ではない。

### 3-2. 配偶者選択における対人嫌悪

ヒトの配偶者選択にかかわる行動には、文化を越えて見られるいくつかの明確な性差がある。例えば配偶者選好の性差については、世界の多くの地域と文化を対象とした調査を行った Buss (1989, 1998) によって明らかにされている。一般に、男性も女性も、親切で、理解力があり、知的で、信頼でき、健康で、創造的な配偶者を選好する。しかし、男性は女性に比べ、配偶者の若さや身体的魅力を重視する一方、女性は男性に比べ、配偶者の高い収入や将来にわたる財政的な見通しを重視する。この性差が生じる理由には、社会的または文化的な影響が当然考えられる。しかし、多くの文化に共通してこの性差が見られることから、生物学的な要因を推測することが可能であろう。

性差をもたらす要因として最も重要なのは、女性は男性よりも繁殖行動に伴うコストがはるかに大きいことである。精子の生産が短期間ででき、

数十年にわたる繁殖行動が可能である男性に対して、女性は妊娠や出産に伴うリスクが莫大であり、繁殖適齢期が男性に比べて短い。このことは、配偶者選択の失敗によって生じるコストが、男性よりも女性にとって甚大であることを意味する。そのため、女性は男性よりも、配偶者選択に慎重である必要がある。配偶者選択における対人嫌悪を考察する際には、この性差を念頭に置いておく必要がある。

さて、対人嫌悪が、われわれにとって有害な人物を拒絶する機能を持つのであれば、それは配偶者選択においても、重要な役割を果たしているのではないか？ すなわち、対人嫌悪や接触回避は、望ましくない異性を配偶者候補リストから除外する機能を持つのではないか？ 現実の配偶者選択では、われわれは必ずしももっとも望ましい異性を配偶者として獲得できるわけではない。そのため、“配偶者候補リスト”には、もっとも望ましい異性だけではなく、多くの候補者が記入されることになる。普通は、嫌悪や接触回避の対象となる異性を配偶者には選ばないから、これらの異性は、配偶者候補リストからははずすことになる。すなわち、嫌悪感や接触回避は、配偶者候補リストの下限を規定するものとして機能していると考えられる。

## 4. スティグマ人物に対する回避：河野らの調査から

### 4-1. 研究の目的

これまで、河野らは、スティグマ的特徴を持つ異性——そのため、配偶者候補となることが不利になる——に対する接触回避の性差について検討してきている(Kawano, Hanari, & Ito, 2008; 伊藤・河野・羽成, 2009; 羽成・河野・伊藤, 2010a, b)。以下、これらの研究の一部を、実際の手続きに即して紹介する。

彼らは、次の仮説、「繁殖適齢期の人々が、後述

するスティグマ的属性をもつ人物との直接または間接的な接触場面の想定を求められたとき、女性回答者は、スティグマ女性よりもスティグマ男性に対して強い接触回避の意志を示すであろう。なぜなら、女性は配偶者選択における失敗のコストが男性より大きいため、望ましくない特徴を持つ異性を強く回避することが、繁殖成功にとって合理的であるからである。」の検証を行うために、大学生の男女を対象にして次のような質問紙調査を行った。

#### 4-2. 調査方法

質問紙では、スティグマ的人物として、以下の7種類の男性と女性が想定された；(1)片腕がない自分自身と同世代の男性と女性、(2)知的障害のある自分自身と同世代の男性と女性、(3)顔全体に重度の火傷跡のある自分自身と同世代の男性と女性、(4)生まれつき顔が醜い自分自身と同世代の男性と女性、(5)子どもを虐待死させたことがある自分自身と同世代の男性と女性、(6)カード破産した自分自身と同世代の男性と女性、(7)よぼよぼの老人である男性と女性。これらのスティグマは、Buss (1998) において配偶者選好の際に重視されていた属性である、健康 (good health)、知性 (intelligence)、身体的魅力 (physical attractiveness)、子どもを望むこと (desire for children)、稼ぐ能力 (good earning capacity)、および若さ (youth) の逆の極端な特徴を列挙し、さらにその中で、被調査者にとって比較的想定しやすい特徴と考えられるものであった。(5)と(6)以外はいずれも身体にかかわるスティグマである。

これらスティグマ男性およびスティグマ女性との直接または間接的な身体接触場面について、以下の8種類が想定された；(1)じかに箸を入れて同じ鍋料理を食べる、(2)握手する、(3)小さなテーブルで向かい合って話をする、(4)その人が長時間座ったイスに座る、(5)その人がずっと使っていたコップで飲み物を飲む、(6)人工呼吸で自分の口か

らその人の口に息を吹き込む、(7)その人が入った後のお風呂に入る、(8)その人が使った後の洋式トイレに入って大用を足す。それぞれの身体接触場面において、前記のスティグマ男性、スティグマ女性と接触することを、どの程度したくないと感じるかを7段階 (1. まったく平気～7. 非常にしたくない) で回答者に評定させた。

さらに、質問紙の最後に、Haidt, McCauley, & Rozin (1994) による嫌悪尺度への評定が求められた。これは、一般的な嫌悪的状况に対する反応の性差を確認するためであった。この嫌悪尺度は、8つの領域から各4項目の計32項目から構成されていた。8つの領域とは、食べ物 (food)、動物的属性 (animals)、身体からの排出物 (body products)、セックス (sex)、暴力的な身体の損傷 (envelope violations)、死 (death)、不衛生 (hygiene)、迷信的な思い込み (magic thinking) であった。

#### 4-3. おもな結果および考察

調査の結果は、上述の仮説に合致した性差を示した。女性回答者は、ほとんどのスティグマおよび実在人物において、スティグマ女性よりもスティグマ男性に対して大きな接触回避得点を示した。一方、男性回答者では、“生まれつき醜い顔”を除いて、異性を同性よりも強く回避するような傾向は見られず、スティグマ男性とスティグマ女性両方に対して同程度の回避得点を示した。また、スティグマ男性に対する回避得点は、男性回答者より女性回答者で大きく、スティグマ女性に対しては、“生まれつき醜い顔”が男性回答者で高かったことを除いて、回答者の性差は見られなかった。Haidt et al. による嫌悪尺度の結果では、女性回答者は、男性回答者よりも一般的な嫌悪状況に敏感であったことから、“基本的”には、女性は男性よりも嫌悪事態に敏感であるが、対人場面においては、対象の性によって回避の程度を変化させられると思われる。

このような結果を説明するためには、進化心理学的視点にもとづいた配偶者選択の要因からの解釈が有効であろう。すなわち、女性は配偶者選択における失敗のコストが男性より大きいため、望ましくない特徴を持つ異性を強く回避することが、繁殖成功にとって合理的なのである。とくに進化心理学者に広く受け入れられているいわゆる進化的適応環境 (EEA; Environment of evolutionary adaptation) では、望ましくない男性を回避することはいっそう合理的に働くであろう。EEA —— およそ200万年から4万年前の環境で、この期間に現在のヒトの心の原型ができあがったと想定する (Cartwright, 2001) —— は、未熟な技術と、血縁者を中心とした比較的少数の集団における親密な個体間の関係から構成されていたと考えられている。EEAにおいては、配偶者選択の失敗は、自分自身だけでなく、家族および血縁者にとっても、より大きな適応上の高いコストを強いるものであったであろう。なお、女性が男性よりも一般的な嫌悪状況に敏感であるという“基本的”な性差についても、繁殖上の性差の観点から、部分的に説明が可能である。すなわち、妊娠と出産をしなければならない女性にとって、有害な対象によって健康を損なうことは、繁殖の失敗に直結するので、嫌悪状況には、男性以上に敏感でなければならないのである。

男性回答者は、“生まれつき醜い顔”においてのみ、スティグマ男性よりもスティグマ女性に対して回避得点が大きかった。また、スティグマ女性においては、女性回答者より回避得点が大きかった。これは、男性における配偶者選好の重要な特徴の一つ、「男性は女性に比べ、配偶者の身体的魅力を重視する」(Buss, 1989, 1999)と合致する。この結果が、同様に身体的魅力の欠如である火傷ではなく、遺伝的に決定されている“生まれつき醜い顔”で現れている点にも注意が必要である。男性にとって、遺伝的に外見が魅力的な女性を選好することは、優れた子どもをより多く残すとい

う目的にとって重要な戦術である。遺伝的な身体的魅力の欠如というスティグマを持つ女性に対して回避の程度が大きかったことは、この戦術の重要性を反映しているであろう。

## 5. 結論

本論考では、身体に対する接触回避に着目し、スティグマの特徴を持つ、自身と同年代の異性とのコミュニケーション場面において生じる接触回避について、河野らの調査結果をもとに検討してみた。河野らの研究では、スティグマの特徴を持つ人物に対して接触を回避しようとする背景には、配偶者選択における性差の要因が潜在的に関与している可能性が示された。すなわち、女性は、同性のスティグマ人物よりも異性のスティグマ人物に対して大きな接触回避を示す一方、男性では、このような性による差異は一部のスティグマにおいてしか見られなかった。このような反応の違いは、女性が配偶者選択における失敗のコストが男性より大きいため、望ましくない特徴を持つ異性を強く回避することが、繁殖成功にとって合理的であるという繁殖上の性差に依存したものであると考えることができる。この結果は、本研究の目的で述べた仮説に合致したものであり、身体に対する接触回避の適応的意義を指摘するものと言える。

ただし、河野らの結果のみから、接触回避の適応的意義を一般化することには慎重でなければならない。この解釈を補強するためには、たとえば、繁殖適齢期間が男性に比べて限定される女性回答者の年齢を変数にした本研究と同様の分析が有効であろう。繁殖適齢期の女性と、中高年以降の女性を比較すると、男性に対する回避の程度が、中高年以降の女性では小さくなるかもしれない。接触回避と配偶者選択との関係を明らかにするためには、さらにデータの蓄積が必要であり、今後

調査を続けていきたいと考えている。

*Journal of Abnormal Psychology, 103, 495-504.*

## 引用文献

- Bowlby, J. (1973) *Attachment and loss (Vol. 2) Separation: Anxiety and anger*, London: Hogarth.
- Buss, D. M. (1989) Sex differences in human mate preferences: evolutionary hypothesis tested in 37 cultures. *Behavioral and Brain Sciences*, 12, 1-49.
- Buss, D. M. (1998) The psychology of human mate selection: exploring the complexity of the strategic repertoire. In C. Crawford & D. Krebs (Eds.) *Handbook of evolutionary psychology*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum associates, pp. 405-429.
- Cartwright, J. H. (2000) *Evolution and human behaviour: Darwinian perspectives on human nature*: London: Macmillan.
- Cartwright, J. H. (2001) *Evolutionary explanations of human behaviour*, Psychology press.
- ダマシオ, A. R. 田中三彦訳 (2000) 生存する脳。講談社。
- DePaulo, B. M., Kashy, D. A., Kirkendol, S. E., Wyer, M. M., & Epstein, J. A. (1996) Lying in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 979-995.
- エクマン, P. 工藤力訳編 (1992) 暴かれる嘘。誠信書房。
- Haidt, J., McCauley, C., & Rozin, P. (1994) Individual differences in sensitivity to disgust: a scale sampling seven domains of disgust elicitors. *Personality and Individual Differences*, 16, 701-713.
- 羽成隆司・河野和明・伊藤君男 (2010a) 対人認知における嫌悪感情の分析：配偶者選好の視点から。椋山女学園大学文化情報学部紀要第9巻1号、59-66。
- 羽成隆司・河野和明・伊藤君男 (2010b) 父母やきょうだいに対する嫌悪感インセスト回避の表れか？ 椋山女学園大学文化情報学部紀要第9巻第2号、45-54。
- 伊藤君男・河野和明・羽成隆司 (2009) 父母およびきょうだいに対する接触忌避。第2回日本人間行動進化学会プログラム抄録集、p. 14。
- Kawano, K., Hanari, T., Ito, K. (2008) Disgust and avoidance for stigmatic persons as reversed mate preference. *The 20th Annual Meeting of the Human Behavior and Evolution Society, Program*, p. 119.
- モリス, D.・石田かおり (1999) 「裸のサル」は化粧好き求龍堂。
- Rozin, P., Haidt, J., McCauley, C., and Imada, S. (1997) Disgust: The cultural evolution of a food-based emotion. In Helen Macbeth (Ed.), *Food preference and taste: continuity and change*. Providence, Oxford: Berghahn Books. pp. 65-82.
- Rozin, P., Haidt, J., and McCauley, C. (2000) Disgust. In M. Lewis, & S. M. Haviland-Jones (Eds.), *Handbook of emotions, 2nd edition*. (pp. 637-653). New York: Guilford Press.
- Rozin, P., Markwith, M., and McCauley, C. R. (1994) The nature of aversion to indirect contact with other persons: AIDS aversion as a composite of aversion to strangers, infection, moral taint, and misfortune.

はなり・たかし / 文化情報学部教授

E-mail: hanari@sugiyama-u.ac.jp

かわの・かずあき / 東海学園大学人文学部教授

いとう・きみお / 東海学園大学人文学部准教授